

Title	<批評・紹介>太平天國と上海 外山軍治著
Author(s)	北村
Citation	東洋史研究 (1947), 10(1): 64-64
Issue Date	1947-12-15
URL	https://dx.doi.org/10.14989/145846
Right	
Type	Journal Article
Textversion	publisher

太平天國と上海 外山軍治著 高桐書院發行

太平天國については、もはや言葉を費すまでもなからう。それは清朝に對する最初の組織的な民衆の反抗であり、同時にまた西歐資本主義の中國流入に對する最初の民衆の反撥でもあつた。西歐資本主義、特にそれが産業資本として中國をその機構の中に組み入れたのが、ケヘン戦争をもつて劃られる一時期であり、またその産業資本の中國志向の先端がはかならぬ上海であつたことは、これまた言ふを要せぬ事實である。ところが太平軍は遂にこの上海を占領し得なかつた。一方、太平軍に追はれた郷紳たちは續々上海に難を避けた。こゝに西歐勢力と中國の郷紳階級との結びつきが行はれたことは容易に想像できる。中國は、日本と同じく西歐勢力と接觸しながら、しかも日本とは逆な特殊の近代化の途をたどつたのであるが、その重要な契機の一として、この太平天國運動に對する西歐勢力と郷紳階級との結びつきがあげられねばならぬと思ふ。アヘン戦争から太平天國に至る時期、またこの時期の上海は、従つて中國近代化の起點及びその舞臺として極めて重大な意義をもつものである。

本書は「太平天國の運動」と「開港場上海との關係を中心として、十五年にわたるその期間に於ける上海附近のでき事」や

「これをめぐる外國關係を描かうとする」ものである。

「これ十五年間、上海自身にとつても最も重要な時期であるし、また中國自身にとつても實に重要な意義をもつた時期である」と考へられるからである。(著者序文)

太平天國と上海との關係は前後二期に分れる。前期は太平軍の積極的攻撃、上海の動搖の時期で、著者はまづ「太平天國の起り」を概観したのち、第二章で太平軍の南京占領、第六、第十章で蘇州、寧波占領と刻々せまりくる太平軍の攻撃の變動とそむによつて惹きおこされた上海の外人、官僚、郷紳らの不安、動搖をえがいてゐる。ついで後期は太平天國の變質による攻撃運動の消極化、これに對する有名な常將軍の反撃の時期である。そこで第十三章「ウオードの常將軍の活躍」、第十六章「ゴルドンの常將軍統率」、第十八章「常將軍の解散」と著者は常將軍を中心として上海側の反撃をものがたり、最後に太平天國が上海に與へ、更にひろく中國に與へた大きな影響を説いて「むすび」とされた。

本書は専門的な論考を目的としたものでなく、一般の知識層を對象としたものであるから、文章は平易であり、處々にはさまざまな史料も日本文に書き下してあつて読みやすい。しかも著者のもつ史上の人物へのすぐれた心理的洞察は、本書の内容を興味深く且つ豊かなものとしており、また最後の、一頁までひといきに讀み通さしめる著者の筆力の卓拔さには、いつもながら感服を新たにす。

(北村)